

聖書:エペソ人への手紙2章17~22節

説教:ともに築き上げられる

はじめに

なんであれ二つのものをひとつにすることがいかに難しいか。私たちは何度も経験してきました。いったい神はどのようにして一つにしていくのでしょうか。

1 平和

1) 二つのものが

17, 18節を読みます。「また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。」

とうじのエペソの教会は、ユダヤ人と異邦人もいっしょに礼拝しておりました。ところが律法を守るべきだと主張するユダヤ人と、律法は関係ないと言う異邦人の間で論争となり、大きな問題になってしまいます。パウロがこの手紙を書いたのもそんな事情があったからでした。

生きていけば人間関係のトラブルは尽きません。一緒に住んでいる家族でさえも、すれ違いでけんかになることはしょっちゅうです。一緒に地球に住んでいても、ほかの国と信頼関係を築くことより、力で脅すことが正しいことであるかのように言われ、平和はますます遠のくばかりです。心ある人たちは、どうしたら二つのものが一つになれるのかと考えますが、いまだに有効な手立てはない。結論から言えば、人間の知恵では絶対に解決できないのです。では希望はないのか。あります。私たちにできなくても、キリストだけが二つのものを一つにすることができます。それはただけんかをしないということではない。からだの器官が互いにいたわり合うように、そうやってからだ全体の健康を維持しようとするのと同じように、二つのものが一つになっていく。それが前回話した内容でした。

2) 一つの御霊によって御父に近づく

その結果、なにが起るか。「一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。」たとえ考え方や感じ方、ことばや文化は違えども、私たちはいっばいっばい父なる神に近づき、同じ神を見上げていきます。そのとき私たちのうちに働いてく

ださるのが、一つの御霊だということです。「一つの御霊」という表現には、二つの意味が込められています。一つは、同じ御霊という意味です。仮にあなたと私で違う御霊が働くのであれば、一つになることはできません。同じ御霊だから人になれます。二つ目の意味は、この御霊には最初から離れていたものを一つにする働きがある。接着剤の働きに似ていますが、接着剤はくっつけても二つのものはそのまま、何か別のものに変わるわけではありません。ところが御霊の場合は違います。19節。「神の家族なのです。」と二つのばらばらだったものがこんどは一つの神の家族になっていきます。

2 家族

1) 肉の家族

この家族のということでは、いつも仲が良いという訳ではありません。むしろ反対に家族だからこそ悩みが深いということがあります。そんなつらい経験をしていますから、人が集まる所に行くとき、身構えてしまいます。近寄りすぎないよう、ほどよい距離を保ち、当たり障りのない会話をする。いつもよそ行きの顔をして決して本心を見せない。そうしたら絶対にいやな思いをしなくて済む。弱いところを見せるなんてとんでもない。馬鹿にされたり、笑われるだけ。これがこの世の集まりに来る人たちの本音です。

2) 神の家族

では神の家族の場合はどうなのでしょう。19節後半の「神の家族」には、二つの意味が込められています。一つ目は、神に属する家族という意味。世の中には家系図を作るのを専門としている方がいます。その方がこんな話しをされていました。家系図を作りたいと依頼しに来るお客さんに、「どうして家系図を作りたいのですか」と尋ねる。いろいろな答えが返ってくるけれど、まとめると結局「究極の自分探しをしたい」からと言っておりました。それを聞いてああそうなんだと思いました。子育てが終わったり、退職したり、人生の大きな山を越えたとき、自分が実はだれにもつながっていないとひとりぼっちだと不安になる。それで、大きな過去の歴史や文化と自分がつながってい

るのを実感したいという思いがわいてきて、家系図を作ろうと考えるのでしょうか。

私たちはどうでしょうか。わざわざお金を出して家系図をつくる必要はない。というのはすでに神の家系図に私たちの名前が書き込まれているからです。聖書に記されている多くの信仰者たち、彼らがたどった苦難の旅路、そんな人たち、歴史としっかりつながっているのだと言われている。これが「神の家族」と言うことの一つ目の意味です。

二つ目は、神に近づいていく家族という意味です。このことは18節の「一つの御霊によって御父に近づくことができる」というところに表されています。やがて私たちは、天の御国において父なる神と会うこととなります。それまで一步一步御父に近づいていきます。それは自分ひとりでがんばって近づいていくのではなく、神の家族である教会の皆さんと一緒に近づいていく。私たちの努力で近づくのではなく、御霊なる神が私たちのうちに働いて、そのように導いてくださいます。

3) 行いではなく

ここで考えましょう。神に対して罪を犯し、背いてきた私たちがどうしてこのように神の家族とされ、御父に近づくことが許されているのか。私たちがなにか善いことをしたからでしょうか。いつも言います。私たちは神に対して善いことなど一つもしていない。頭では善いことはなんであるかを知っていながら、実際にはその反対のことをしている。9節にあるとおりです。「行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。」

では救われた私たちは何を誇るのか。私たちは救い主であるイエス・キリストを誇ります。いまや神の家族の一員に加えられていることを誇ります。

3 一つの家のように

1) 基礎 (要の石)

さて、家族というのは一緒に住んでいけば自動的に親しい家族になるわけでないことは皆さんもご存じです。試練を経ながら少しずつ結びつきを強くしていく。それが理想の家族でしょう。神の家族も似ています。最初から立派な家族になるのではない。家を建てていくように時間をかけて作られていきます。家を建てるとき、基礎と家の建て方が大切であることは皆さんご存じです。そこでまず基礎の話から。20節。「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。」使徒たちや預言者は、神によって召し出されてイエス・キリストをこの世

の人々に指し示しました。使徒たちも預言者たちもすばらしい信仰者ではあるのですが、大切なのは彼らはだれの上に建てられていたのかです。キリスト・イエスご自身が要の石である。要の石というのは建物の基礎のことです。高いビルやマンションを建てるとき、固い岩盤を基礎にしないといけません。すぐ下に岩盤がなければ岩盤に届くまで杭を打つ。そうしないと建物が傾いてしまいます。信仰のことで言えば、イエス・キリストが固い岩盤、基礎となる。この上に、この神の家族の家が建てられている。別の言い方をすれば、キリスト以外のものを基礎としている教会があるなら、もはや教会ではないということになります。

2) ともに

次に家の建て方です。基礎がしっかりしていても建て方が悪いと大嵐に遭えば簡単に壊れてしまうでしょう。21, 22節。「このキリストにあつて、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあつて、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」

「組み合わされて」は細かく訳すと「ともに組み合わされて」です。ともに組み合わされ、ともに築き上げられ、そんなふうに「ともに」を何度も繰り返しています。なぜ「ともに」なのでしょう。

建築の専門家でなくても、どうやった丈夫な家が建つか、簡単な原理はわかるでしょう。縦の柱と横の梁を組み合わせただけでは、まるでマッチ棒で作った家みたいに横から力を加えるとすぐに壊れます。そうならないようにななめに筋交いというものを入れると、建物は頑丈になります。教会もこれと同じです。牧師がトップダウン式にあなたはああしてこうしてと指示したり、あるいはある強い信徒だけががんばっている教会は、一見強いように見えるけれど、なにかあればすぐに倒れてしまいます。どうしてか。横のつながりが弱いから。「ともに」ではないからです。

神が建ててくださる教会はそうではない。いろいろな賜物をもった人たち、言葉を変えれば個性豊かな人たちを神さまが呼び集めてくださいます。その人たちが横につながっていくことで組み合わされて、筋交いとなっていく。それでしっかりとした教会が建てられていく。それが「ともに」ということの姿です。

それは誰がしてくださっているか。皆さんのうちに働いてくださる御霊がそうしてくださいます。そう言われても皆さんには実感がないかもしれませ

ん。けれども私は牧師として、皆さんのうちに御霊が働かれていくのをいつも見させていただいております。牧師なんてほとんど何もできない。皆さんが組み合わされていくのです。どうやってでしょうか。なにか特別な技術というものがあるのか。そんなものはありません。非常にシンプルです。皆さんがいつもしているとおりです。弱い自分を神の前にそのまま表していく。それだけです。そこに神の御住まいが建てられていく。その中に私たちが招かれている幸いに感謝したいと思います。